

## 3月5日 四旬節第1主日

創 9:8～15    1ペト 3:18～22    マコ 1:12～15

### 1. マコ

vv.12-13 「それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」

マルコ福音書は、イエスが誘惑を受けられた事実だけをここに書きました。恐らくそれは、サタンの誘惑がこの時だけではなくて、イエスの生涯にわたってのものであったという理解によると考えられます。洗礼を受けてメシアとしての歩みを踏み出したイエスに、サタンがそのメシア性を妨げるための誘惑を仕掛け、イエスがこれをどのように退けられたかを福音書から読み取ることが期待されているのです。ファリサイ派の人々が来て天からのしるしを求めたとき(マコ 8:11 以下)、ペトロが主の受難の予告に反論したとき(マコ 8:31 以下)、さらに十字架の上での最後の時にも(マコ 15:29 以下)、サタンの誘惑は続いていました。

私たちがキリスト教信仰を、そのような誘惑を退けられたイエス・キリストの福音への理解によって捉え直すことは、悔い改めの大切な前提です。

v.15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

“悔い改め”ということが、通俗的には“悪い行いを改めて良い行いをする”というふうに理解されています。私たちが取り囲む世間では、何でも都合のよいこと、困難を解決したり生活を豊かにしてくれるもののことを“福音”と呼んでいます。しかし聖書が語っている“悔い改め”、特にイエスが語り、使徒たちが宣教した“悔い改め”はもっと特定のことに向けられていました。それは福音を信じるようになること、イエス・キリストの受肉と死と復活によって実現した神の国の福音を受け入れることであります。教会が使徒継承によって受け継いで来たものは、キリストの福音、罪の赦しの福音、神の国の福音でありますから、今朝私たちは改めて「悔い改めて福音を信じなさい」と呼びかけられているのです。

### 2. 1ペト

神は洗礼によって、救われる人々と滅びに至る人々を分けられます。普段から聖書に親しんでいる人は、この区別が救済史を理解するための当然の前提であることを知っています。キリスト教の諸信条も同様であります。洗礼は肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることだと教えるこのテキストは、恐らく古代教会の洗礼式の儀式書からの引用で、そこで“正しい良心”と表現されているのはキリストの福音への正しい信仰のことです。

人は洗礼を受けているか否か、その信じている福音が正しくキリストの福音であるか否かによって、区別されるのです。それは永遠の区別、この世においてだけでなく神の国に至るまで有効な区別であることを、現代のキリスト者は再認識しなければなりません。イエス・キリストの恵みによって教会に委ねられている“洗礼への招き”の計り知れない富を、財産を地の中に隠していた僕(マタ 25:14-30)のように、現代の教

会は退蔵してはならないのです。

区別や差別に対して異常なほどの敵意と警戒心を示す近年の風潮は、キリストによる救いを与える“洗礼への招き”という計り知れない富に対して、私たち教会が盲目になってしまったことの裏返しであるかも知れません。

教会を巻き込む歴史上の各種の分裂や闘争の中で、どれほど多くのキリスト者が「私は洗礼を受けている！」というたった一つの事実を心の支えとして生き抜いて行ったか、計り知れないのです。第二バチカン公会議が“エキュメニズムに関する教令”(3)によって明らかにした原理に、信者一人一人が良い理解を持つことが期待されます。

### 3. 創

初代教会はノアの契約を再解釈して、それはキリストによる新しい契約によって今の時代に現実のものとなったと考えました。なぜならノアの洪水によって予兆された洗礼によって、今やだれでも信じてこれを受けると人は救われるようになったからです。

キリストの福音と洗礼はすべての人に提供されていて、信じてこれを受けると人は救われるのです。キリストにあっては、ノアの物語りは“おとぎ話”ではなくて、“恵みの時、救いの日(Ⅱコリ6:2)”の到来の約束を告げる神の言葉です。

四旬節は悔い改めの時であると言われます。しかしその悔い改めを、“悪い行いを改めて良い行いをする”というレベルで、キリストとその福音への信仰とは無関係な、単なる善行にしてはなりません。「信じない者は滅びの宣告を受ける」(マコ16:16)という聖書の言葉の厳しさの中で、現代の教会が再び“洗礼への招き”の計り知れない富を感謝出来るようになることを、天上のキリストは切に求めておられます。

アーメン。

## 3月12日 四旬節第2主日

創 22:1～18    ロマ 8:31～34    マコ 9:2～10

### 1. マコ

v.7 「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

イエスがヨハネから洗礼を受けられたときに天から聞こえたのと同じ「わたしの愛する子」という称号が再び登場していることに注目しましょう。それはダビデ家の王の即位の定型句である詩 2:7 を想起させるもので、共観福音書がこれをイエスが神からの救い主であることの宣言として理解したことは明らかです。この“山上の変容”の伝承では、さらに「これに聞け」が加えられています。

イエスはこのとき、将来弟子たちがイエスの受難と死と復活の出来事の意味を理解するようになってから、この「これに聞け」を彼らの宣教の主題とすることを命じられました。全世界のカトリック教会の会衆は、四旬節第2主日のミサで、今年も使徒たちの証言する「これに聞け」という天からの声を再び聞いているのです。

ミサの“ことばの典礼”で福音書が朗読される時、“イエスがそこで語られる”という説明はいわば幼稚な比喩であって、それは決して朗読者がまるで“口寄せ(サム上 28 参照)”のようになって死んだイエスを呼び起こすという意味ではありません。聖伝と聖書に関係なく、今の時代に対する独自のイエスのメッセージを新しく聞くことが、ミサをささげる会衆に期待されているという主張は、ただの作り話にすぎません。「これに聞け」の「これ」を明確に理解することをイエスが教えてくださったと、共観福音書は証言しているのです。

福音とは“キリストの福音”、“受難と死と復活によって実現した罪の赦しの福音”、“神の国の福音”であって、イエスの死と復活から切り離されたただの“愛の教え”や“社会から見捨てられた人々への援助”のことではありません。

### 2. 創

新約聖書はアブラハムを“信仰の父”と呼んで、信者にその“信仰の模範”に倣うように勧めています(ロマ 4 章)、独り子イサクを献げようとした話は私たちの行動の手本としてではなく、むしろ神御自身の愛の証しとして(ヘブ 11:17-19)、さらには救い主キリストの贖いの御業を指し示すものとして理解しました。

「あなたがこのことを行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかつたので」(v.17)と書かれていることは、イエス・キリストにおいて初めて現実の出来事となったからです。使徒パウロは 創 12:7 を引用して、「この“子孫”とは、キリストのことです」と説明し(ガラ 3:16)、「それは、神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした」(同 v.22)、「あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による(神の国の)相続人です」(同 v.29)

と語っています。

このように、“キリストの受難と死と復活によって実現した罪の赦しの福音”への理解を前提として旧約聖書を読むことを、弟子たちは復活の主から教えられて“使徒”(福音宣教のために遣わされた者)となったのでした(ルカ 24:25-27,44-48 参照)。私たちもこの使徒たちの証言に基づいて、今朝の創世記のテキストの朗読からキリストの福音を聞いているのです。

### 3. ロマ

教会では昔から信者の教育のために、“教え”が作られ用いられて来ました。私たちが知っているものには、かつての“公教要理”とその流れを汲む“カトリック要理”があり、近年では“カトリック教会のカテキズム”と“カトリック教会の教え”があります。先ずこれらの書物が、使徒継承に基づいている非常に素晴らしい内容をもって構成されており、現代の教会の有益な財産であることを指摘しておきましょう。

かつては、洗礼志願者は“公教要理”の主要な部分を暗記することが要求された時代がありました。しかし今日、カトリック教会の現役の信者の大部分にとっては、それらの書物はいわば“読まれざる名著”のようになり、旧新約聖書と共に、“誰でも知っているけれども、誰も読んだことがない書物”になっています。それは一般の信者だけではなくて、教導職にも当てはまる現象です。このため“福音”や“キリスト教信仰”というものへの理解が曖昧になり、教会全体が実際に主の小羊の世話をする(ヨハ 21:15-17)能力に欠けて来ています。

教会の現役の信者の大部分は、教会の教えに違反した落ちこぼれの信者たちや、カトリックではない他のキリスト教会で洗礼を受けた信者たちを、「私たちすべてのために、その御子をさえ惜みせずに死に渡された方」(v.32)に「選ばれた者たち」(v.33)として、受け入れようとはしていません。現実にかトリックの小教区で、司祭も含めて大部分の信者の心にあるキリスト教の“規範”らしきものが、本来の使徒継承から、聖伝と聖書から、いつの間にか乖離してしまっているのです。

しかし、全世界のすべての洗礼を受けて義とされた小羊たちのために、天上のキリストが今朝この使徒の叫びを聞かせて、目を注いでくださっていることに感謝しましょう。

vv.33-34 「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることが出来ましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」

アーメン。

## 3月19日 四旬節第3主日

出 20:1～17    1コリ 1:22～25    ヨハ 2:13～25

### 1. ヨハ

v.17 「弟子たちは、“あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす”と書いてあるのを思い出した。」

2000年9月28日の早朝に、当時のイスラエルの野党リクードのシャロン党首が、イスラム教徒が管理するエルサレムの“神殿の丘”を訪問したことに端を発して、パレスチナ住民蜂起“インティファダ”の火が燃え上がり、やがてイスラエルによるヨルダン川西岸での“分離フェンス”建設に至った経緯を、殆どの日本人は単なる中東紛争という私たちに無縁な国際問題の一つとして見ています。昨年新党カディマを結成して国民の大きな支持を得ていたシャロン首相が今年1月4日に脳卒中に倒れて、現在首相代理を務めているオルメルト氏は、今月に入って遂に、現在も建設継続中の“分離フェンス”を国境化する一方的な方針を公に表明しました。

シャロン党首の“神殿の丘訪問”が、エルサレムの主権はイスラエルにあることを誇示する象徴的な行動であったことを、世界中のどれだけのキリスト者が理解したでしょうか。今朝の福音書の日課で、弟子たちが想起した詩69との関連で、現代イスラエルのパレスチナ問題に対処する姿勢を理解出来た我が国のキリスト者は何人いるでしょうか。イスラエル建国から間もなく60年になろうとしているのに、未だに出口の全く見えないパレスチナ問題の行方を、世界は今後も長きにわたるであろう今世紀の国際紛争の一つとして捉えています。

神殿から商人たちを追い出すという大胆な行動に出たイエスを、ユダヤ人たちはただの暴徒のようにしか見ませんでした。しかし初代教会は使徒たちと共に、死者の中からの復活によって救いを実現してくださったイエスの“神の国を思う熱意”こそが、福音の中心的な主題であることを理解しました。「聖書とイエスの語られた言葉とを信じた」(v.22)とは、神の救済史がイエスの死と復活によって決定的に終末の完成に近づいたことを信じたということです。

ユダヤ人たちは今日もなお、地上のエルサレムが彼らの手に戻ることを期待していますが、一・聖・公・使徒継承の教会は、キリスト再臨の日に主の民が受け継ぐであろう天のエルサレムに希望をおいています。そのいずれもが、救済史の神への期待、すなわち“あなたの家を思う熱意”であることを、私たちはもう一度よく考えてみる必要があります。

### 2. 出

v.3 「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

それは、イスラエルが神に贖われた民であるからでありました。この事実を抜きにしては、救済史も聖書も理解出来ません。同様に、キリスト教が“神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会”(使



## 3月26日 四旬節第4主日

歴下 36:14~23 エフェ 2:4~10 ヨハ 3:14~21

### 1. ヨハ

vv.14-15 「そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

ミサにおいて司祭の手によって献げられるいけにえは、かつての十字架上のキリストのいけにえと同一のものであり、その秘跡的再現であることを、第二バチカン公会議は再確認しました(典礼憲章 7)。そして次のように述べて、教会の絶え間ない確固たる伝承を宣言しました。

「我々の救い主は、渡されたその夜、最後の晩餐において、自分の体と血による聖体のいけにえを制定した。それは、十字架のいけにえを主の再臨まで世々に永續させ、しかも、愛する花嫁である教会に、自分の死と復活の記念を託するためであった。それは、いつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずなであり、キリストが食され、心は恩恵に満たされ、未来の栄光の保証が我々に与えられる復活の祝宴である。」(同 47) 私たちは世の罪を贖う御子の奉獻に、この秘跡を通して一つに結ばれます(洗礼の主日/奉納祈願)。

この生き活きとした実感は、教会が使徒継承によって受け継いで来たものであることを、私たちは今朝の福音書の日課から理解することが出来ます。それは昔話や伝説のようなものではなくて、神が「時が満ちて」(マコ 1:15、ガラ 4:4)歴史に決定的に介入された出来事でありました。聖なる歴史、神の救いの歴史という意味で、これを“救済史(Heilsgeschichte)”と呼びます。そしてすべての歴史は、キリストの再臨の日には結局は救済史に参加することになるでしょう。

私たちの教会が正常で健全であるかどうかは、“ことばの典礼”で十字架の福音が純粹に語られているかどうか、“感謝の典礼”でその福音に従って正しくキリストのいけにえが献げられているかどうか、という観点から判断されなければなりません。

### 2. エフェ

v.8 「事実、あなた方は、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」

キリストの十字架の死と復活が救済史の中の出来事であるように、私たちも洗礼の秘跡によってその救済史の中に生きる者とされました。私たちはキリストの死に与って“その血によって贖われ、罪を赦されました”(1:7)。そしてその復活にも与って神の国を受け継ぐ民の中に加えられました。ですから使徒パウロは祈って言いました。「御父があなた方に知恵と啓示との霊を与え、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐもの(神の国)がどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように」(1:17-18) と。

与えられた救いへのこのような理解、正しい福音理解とは何の関係もない単なる人道上の“善い業”が、繰り返し歴史の教会を誤った方向へと迷わせて来たことを、私たちは直視すべきです。特に原理主義的な傾向のキリスト教集団が、20世紀後半に全世界で大いに勢力を伸ばし、21世紀の教会の脅威となっていることを軽視してはなりません。それらは通常“純粋に善意の”人々の集団であって、既成の教会の側の努力する少々の“善い業”ぐらいで対等に立ち向かうことは殆ど不可能です。また通常彼らは聖書をよく読んでおり、彼らの“善い業”の論拠をそこから得ています。問題点はその聖書理解や解釈にあるのですが、その誤りに気づいて反論するには、既成の教会の信者がこれまであまりにも惰眠をむさぼって来たために、無力なのが実状です。

手っ取り早い解決法も近道も、そんなものは存在しないことに、私たちは目覚めなければなりません。真のキリストの教会が用いることの出来る武器は、ただ“キリストの福音”だけなのです。一・聖・公・使徒継承の“教会の信仰”だけなのです。そのことを思って、私たちは今朝もミサの交わりの儀の中で、共に祈りましょう。「私たちの罪ではなく、教会の信仰を顧み…… てください」と。

### 3. 歴下

南王国ユダがその独立を失ってバビロンの属国となった紀元前 587 年からほぼ 70 年を経て、紀元前 516 年にエルサレム神殿は再建されました。歴代誌下は、この記事を救済史の新しい展開の序章として、その最後に置きました。それはイスラエルの神に期待する熱き信仰の証しであったと考えられます。

旧約聖書の諸書も、新約聖書の福音書や使徒たちの書簡類も、一般の文学におけるようにそれ自身で完結する結末を持っていないことを知りましょう。聖書の中には、“めでたし、めでたし”で終わるような完結した作品は存在しません。救済史への期待を抜きにしては、教会の信仰を語ることは出来ないのです。

私たちのミサで、今朝も主の祈りに添えて副文が唱えられるのはそのためです。

司祭： 私たちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを、待ち望んでいます。

会衆： 国と力と栄光は、限りなくあなたのもの。

アーメン。